

救護活動収束へ向けた検証班 5月7日～5月11日

震災から58日目となる5月7日、救護第25班と一緒に、初動で現地に行った経験のある上木原宗一部長と、初めて現地を訪れる河添真理子看護部長が、視察と検証のため石巻に入った。

毎日送られてくる石巻からの活動報告から、臨時救護所や巡回での医療ニーズは減ってきていることが推測された。その上で被災地での救護活動について、地元を引き渡すべきかどうかで、そのとき現地にいた救護班内で意見が食い違い、激しい議論になっていた。救護現場では活動に一生懸命になり、感情移入もまじって客観的な判断が出来にくくなることが間々ある。視察・検証班が現地入りしたのはそんなときだった。被災地の最初の状況と比較してどうなのか、また初めて現地を見てどう思うかを考慮して現地の状態を把握し、救護班の意見をまとめ、熊本としての的確な判断を下す必要があった。



上木原宗一部長

救護第1班として石巻に入った上木原部長が目にしたのは、病院を取り巻く地震・津波のつめ痕と、周辺の医療機関が壊滅的な打撃をこうむる中で何とか機能していた石巻赤十字病院だった。次々運ばれてくる急患者や被災者の中で、震災直後

から懸命に医療救護を続ける現地スタッフ。自身が被災した関係者も多く、長時間の疲れきっていた。そんな状況を目の当たりにした熊本の救護第1班と第2班の救護班員は、寝食を忘れて過剰なほどに仕事をがんばった。

「自分の同胞が痛んでいるというのは、かなりこたえた。国際救助では経験したことのない思いだった」（上木原部長）。そのときの患者のことがいつも気になっていた。救護活動に行った熊本のスタッフも、幾人かはそんな心的ストレスが帰熊後も残っていた。「フラッシュバックするかもしれないけれど、どうしても、もう一度現地へ行きたかった」（同）。

震災で壊滅的打撃を受けた地域医療は、開業医が活動を再開するなど、徐々に復旧し機能してきていた。震災当時、玄関のホールは患者や医療スタッフでごった返し、外来の廊下は簡易ベッドが置かれて中等症エリアのスペースになり、廊下の壁は被災者の消息を示す伝言板になっていた石巻赤十字病院もきれいになり通常業務の状態に戻っていた。当時、次々と搬送されてくる患者の状態をみてトリアージタグを巻き選別し、悲壮感を漂わせながらしていた病院スタッフも、顔つきがまったく変わって、明るくはないけれど落ち着きを取り戻し、日常的な状態に戻りつつあった。

しかし、避難生活を余儀なくされている人は震災直後の21万人から減ってはいるものの、5月7日の時点でも全国でなお12万人に上っていた。被災地では瓦礫の撤去が進んでいたが、

建物が建ち始めたわけではない。

検証は、地域医療が地元で自立できるまでに回復したかどうか、避難所から医療サービスを受けることが出来るかどうかを判断すること。それに応じて派遣救護活動を徐々に縮小し収束していくことにあった。熊本は当初、石巻赤十字病院で中等症エリアを担当、その後巡回を経て東松島市の鳴瀬庁舎に臨時所を開設、牡鹿半島（第8エリア）の巡回も始めたところだった。臨時所は撤収の時期を模索しており、牡鹿半島の巡回でも医療ニーズは多くはなかった。

検証班は、石巻赤十字病院で地域の医療機関の復旧状況とどの程度機能しているかを確認し、避難所では代表に面談、地元医療機関の復旧状況と利用手段などを話し合った。その結果、8割くらいは地域の医療サービスに移行することを納得してもらい、後の2割くらいを救護活動の対象として以後の救護班に引き継ぐことに。鳴瀬庁舎の臨時救護所は撤収することになった。

診察を受ける側にとって巡回があるに越したことはないが、救護班の巡回は長く続くものではなく、その活動が結果的に地元の自立を妨げることにもなりかねない。初動のときは積極的に取り組み、感謝されるだけでいいが、収束の際は救護の巡回が相手に過剰な期待をもたれないよう、地元の医療機関にうまく切り替わるよう、配慮しなければならない。時には診察だけにとどめ、地元の医療機関への受診を勧めることもある。

熊本からの単独救護派遣は、第28班が帰熊する5月31日まで続くが、後の班の巡回目的は診察や視察、情報収集に重点を移した。バスが1日に数往復運行しており、交通手段が確保されていることや、地元医療機関による巡回も始まったことによる。